

[日本の不思議あるある？！ その1]

「国際結婚という言い方は、日本にしかないのだそうですね。」と、友人の一人が言った。日本人が異国人と、外国人と結婚する。それが特別だった時代の名残なのかもしれないが、あまりにポピュラーな日本語なので、私自身にも当てはまっていたのに、考えたこともなかった。

他の国と国境を接していない、海に囲まれている島国の日本は、地理的にみると確かに特別な存在だ。小さな国々が繋がっているヨーロッパの歴史を思うと、民族大移動から十字軍の遠征、様々な戦争により、国境が常に変化してきた中で、「外国人」という言葉はどのように使われてきたのだろう。王妃マリー・アントワネットを例に挙げるまでもなく、政略結婚も多かったし、今では「民族」そのものもゴツチャになっているはず。アメリカなんて、ヨーロッパからの移民で成り立った国、いわゆる「純粋なアメリカ人」とは誰のこと？「アメリカ ファースト！」と声高に叫んでいたトランプ元大統領だって、先祖はドイツからの移民だし、日本で名の知られていた政治家のキッシンジャー氏やライシャウアー氏はドイツ系ユダヤ人。

ヒトラーはオーストリア人だったが、「アーリア人の血」を重視して、一時ユダヤ人の作品の演奏までも禁止したら、メンデルスゾーンやベルリオーズ、マーラーなどの曲がコンサートから消えて、大騒ぎ。この禁止令を取り下げたという話もある。

モーツァルトは何国人？ シューベルトは？ フランツ・リストは？ 作家のカフカは？ 彼らの生まれた場所は、今の時代、どの国？ 祖先はどこから？ そんな国々にとって、「国際結婚」は全く当たり前の話だ。

そうそう、「国際結婚」の他に、「国際派」「国際化」という言い方もあるけれど。

「国際コンクール」「国際マラソン」は耳にするが、「国際音楽」「国際料理」なんていう言葉は存在しない。でも実は日本人は、食べ物も言葉もファッションもお祭りも、音楽も家の作りも、明治時代初めからどんどんと外国のものを取り入れて、「日本化」している。それも何の抵抗もなしに。

どこかで読んだ文章に、「舶来のものに創意工夫を凝らして、それに磨きをかける、という日本人の“実用新案的才能”とあったが、とにかく、日本人の吸収力と“野心”はすごいのだ。

例えば、その昔、陸軍はドイツ、海軍はイギリスからそれぞれの様式を取り入れた。何故って、当時はそれが世界最強だったから。詰襟服やセーラー服については、いかがでしょう？！ セイラー服、もとは文字通り水兵さんの

制服。右翼、左翼という言い方だってイギリス議会の形からだそうだ。

そして、150年少し前に西洋から取り入れられた音楽。様々な国の民謡には日本語の歌詞がつけられ、それらの多くは私たちの生活の中に溶け込んでしまった。今では「日本の歌」と思われているほどになった曲も多い。また、取り入れられた西洋音楽を基盤として音楽教育が行われ、新しい曲も数々作られて、皆に広がっていった。

「日本のうた」というタイトルの私の初めてのCDアルバム以来、日本でのコンサートでもピアノ伴奏を弾いてくれたオーストリア人の元夫は、日本の聴衆からの、ある問いにいつも戸惑い、困惑していた。

「なぜ日本人ではないのに、こんなにすばらしく日本の歌を弾けるのですか？」
実は、私たち演奏家にとって、このCDの中の曲の数々は、「日本人の作曲による日本語の歌」ではあるけれども、音楽としては「日本の歌」ではない。それなのに、それらを日本の曲とってしまうほど、消化しきっている日本人の意識が凄い。

この言い方はちょっとわかりづらいかな。

ひとつ、逆の例を挙げてみる。私はヨーロッパでのリサイタルの際、必ず日本の作曲家の歌曲のグループもプログラムに入れていた。でもコンサート後によく言われたのが、「日本の歌は“モーツァルト”みたい？」。外国の聴衆は、「日本の歌」という言葉から伝統的な日本音楽を想像し、“期待”していたのだ。まさか日本人の私が、伝統の音楽には全く精通せず、「西洋音楽」のみで育ったなど、思いもよらず、考えもしなかったせいだろう。

ドイツに留学してから、歴史や文化、音楽、それこそ政治に関してまで、アチラの人たちから、しょっちゅう「日本についての質問」を受け、それに何もしっかりと答えられない自分が、恥ずかしかった。

ヨーロッパのそれぞれの国の人たちにとっては、自国の歴史や文化を知ることがまず第一。それ以外の国の“話”は、その次だ。例えばドイツの人たちは、クラシック音楽ではないイギリスやフランス、ロシアなどの曲は、いわゆる流行歌でない限り、「なんとなく耳にして知っている」程度だし、スティーヴン・フォスターなんていう名前の作曲家は聞いたこともない。だから私たち日本人が、それらを“押しなべて普通に”知っていることにとても驚く。イギリス民謡、ロシア民謡、ドイツ民謡、アメリカ民謡、シャンソン、カンツォーネ、ジャズなどなど、色々な国の音楽が平均的に国民に知られている日本の状況は、彼らにとって非常に不思議らしい。

不思議と言えば、日本のお祭り騒ぎ。多分、私たち日本人は大のお祭り好きなのだ。どんな機会も逃すことなく、「お祭り」にして、経済も潤す。お神輿の
で日本の伝統的なお祭りはここではおいておいて、一番最近に取り入れ
られた“ハロウィーン”。ヨーロッパにいたころ、アメリカの友人たちから
「サンクス ギビング デイ」の食事に招かれ、仮装の子供たちが家々を
回ったりする、収穫祭のお祭りの話を知った。もともとはケルト民族のお祭り
だったと聞く。万霊節の前の日だ。

「誰か」がこのアイデアをアメリカから日本に持ち込み、楽しむ人々を見つけ、
ビジネスにした。ビジネスは様々な広がりを見せ、その源自体は重要でなく
なり、いつの間にか「お祭り」になり、いつの間にかただの「大騒ぎ」になって
しまった…。いつの間にか巷で「ハロウィーン、ハロウィーン！」と言われる
ようになり、私は辞典を引いた…。なぜかを知りたくて。

ヴァレンタイン・デイしかり。誰も「聖ヴァレンタイン」さんのことなど思いも
しない。女性からチョコレートをプレゼントされる日、なんて誰が(日本で)
決めたのだろう！？ お返しの好きな日本人のためにホワイトデーまで作
られた。

そして12月24日の聖夜、イエス・キリスト誕生の日。ヨーロッパの大体の
国では、その誕生をひっそりと待つ。お昼で閉まるお店も多い。「恋人たち
の夜」？ 全然！！ 24日の夜は家族とともに過ごし、夕食も結構控えめ
だ。「お生まれになった後」の25日と26日が大きなお祝いで、大勢でパーティ
やら食事会などが催される。

え？ サンタクロースはいつ来るのかって？ セント・ニコラウスはセント・ニコ
ラウスの日、12月6日に従者とともに来る。カトリックの国では24日の夜に、
家々にそっと来るのは「神の御子」で、その姿は“本当は”見えない。見えない
ほどちっちゃな天使のような姿、と“思われている”。この「神の御子」が、
ツリーの周りでリンリンと微かになる鈴の音とともに、プレゼントを配るため
に訪れるのだ。

日本のクリスマスの習慣は多分、第2次大戦後にアメリカから入ってきた
のだろう。私が一番びっくりしたのは、アドヴェント(待臨節)は一緒に取り
入れられなかったらしく、11月初めには街にもうイルミネーションが灯り、
クリスマスの雰囲気“作られる”。そして、12月26日に、クリスマスの飾り
やツリーがさっさと片付けられると、すぐに松飾りがいたるところに。この
切り替えはスゴイ！！

宗教とはまったく関係ない形のクリスマス、商業目的のためのクリスマス。

ヨーロッパでのクリスマスを経験すると、ちょっぴり寂しい、悲しい。1月6日の「3人の王様の日」まで飾られるクリスマスツリーも、もちろんない。今は復活祭(イースター)も日本ではほとんどないが、もしかしたらそのうち「誰か」がこれも「日本式お祭り」に取り入れるかも?! そうそう、カーニバル(謝肉祭)はいかがでしょう?! (サンバを踊るだけではないゾ。)

私が心惹かれるのは、5月1日の「鈴蘭の日」。フランスの街角のいたるところでは、小さな鈴蘭の花束が売られたり配られたりする。愛する人へのプレゼント。受け取った人には幸せが訪れるという。これこそ、素敵なビジネスにならないかしら?!

何しろ、生まれると神社にお宮参りをし、教会で結婚式を挙げ、お寺で葬儀をすることを不思議に思わない国なのだ。寛容と言えばそうなのだが、こんな国は本当に世界中どこにもない。

私が結婚するとき、相手に尋ねられた。「もし白いウェディングドレスを着て教会で結婚式をしたかったら、もう一度教会に入ってもいいけど、どうする?」なんでも、教会の在り方に疑念を持ったので何年も前に“脱会”した。教会に属していないと、そこでの式は挙げられない。日本の女性が「教会での結婚式」に憧れることを知っていた上での問いだった。

いやいや、32歳にもなって、白いドレスにも「教会での結婚式」にもこだわりません、が私の答えだったが、なにより、「そのためだけにまた教会に入る」ことが何だか奇妙だったからだ。

ところで「国際結婚」で、外国語に訳すと、いったいどんな言葉になるのだろうか。